

1920 年代における アヤ・デ・ラ・トーレの政治思想

小 倉 英 敬

1. はじめに

1920 年代にペルーカビクトル・ラウル・アヤ・デ・ラ・トーレ (1895~1979) によって、ラテンアメリカ全体の社会変革を目指す運動としてアプラ運動 (アメリカ革命人民同盟 APRA: Alianza Popular Revolucionaria Americana) が創設された。アプラ運動は、その後ラテンアメリカにおいて 1930 年代から 1970 年代に大きな潮流となるポピュリズムの典型的な運動と見なされている。

筆者はポピュリズムを、①1930~70 年代に途上地域の諸国に登場し、②産業資本家、新中間層、労働者、農民を軸とした階級同盟を基盤として民族主義的傾向を強く有する、③カリスマ性のある指導者が登場した時に運動が拡大して政権を掌握したこともあり、④経済発展モデルとしては輸入代替工業化路線を採用した、という 4 つの共通点を有する政治的・社会的な運動であると定義する。

アプラ運動に基づいて 1931 年にペルーアプラ党 (PAP: Partido Aprista Peruano) が結成された。しかし PAP が政権に到達したのは、結成後半世紀を経た 1985~90 年、2006~11 年の 2 期にわたりアラン・ガルシア政権においてであった。PAP が政権に到達したこれらの 2 期

のうち、2006～11年のガルシア政権は、新自由主義モデルに基づく経済政策を展開するなど、1920年代後半に形成されたアプラ運動の思想から大きく逸脱していたと判断される。それでは、1920年代後半に形成されたアプラ思想とはどのようなものであったのか。アヤ・デ・ラ・トーレが1920年代に執筆した諸著作や執筆された書簡から、その思想を検証してみる。

<1920年代のアプラ運動関連の略史>

1919年	5月、レギア擁護のクーデター発生 9月、レギア政権成立
1920年	3月、ペルー学生連盟議長としてクスコで開催された学生連盟会議を主宰
1921年	1月、ゴンサレス・プラダ人民大学運動開始 6月、『クラリダ』誌創刊
1922年	
1923年	3月、マリアテギがヨーロッパから帰国 5月23日、レギア政権の保守化を対して「5月23日事件」発生 10月、アヤ・デ・ラ・トーレが国外追放
1924年	5月、メキシコ学生連盟にインドアメリカの旗を手渡す 7月、アヤ・デ・ラ・トーレが訪ソ
1925年	3月、アヤ・デ・ラ・トーレがロンドンに到着 5月、パリで米国のメキシコ侵略に抗議する集会開催
1926年	10月、アヤ・デ・ラ・トーレがロンドンで中国革命記念夕食会に出席 10月下旬、ラビネスがブエノス・アイレスからパリに到着 10月末、アプラ・パリ支部結成 11月、アヤ・デ・ラ・トーレが「ザ・レーバー・マンスリー」に「アプラとは何か?」を掲載
1927年	1月、パリ支部に「アプラ反帝国主義研究センター」設立 2月、ブリュッセルで反帝国主義国際会議開催 8月、アヤ・デ・ラ・トーレがヨーロッパを発し米国を経てメキシコに到着

1928年	1月、「メキシコ計画」策定 5月、『反帝国主義とアプラ』を脱稿 6月、アヤ・デ・ラ・トーレがメキシコを出発して中米諸国を歴訪 12月、アヤ・デ・ラ・トーレがパナマで身柄を拘束されドイツに送られる
1929年	5月、ブエノス・アイレスでラテンアメリカ共産党会議開催 5月、パリ支部解散、直ちにエンリケスを書記長としてパリ支部再建 8月、フランクフルトで第2回反帝国主義国際会議開催
1930年	2月、エンリケスがアルゼンチン・ボリビア経由でクスコに潜入帰国 4月、マリアテギ死亡 8月、レギア政権崩壊 9月、エンリケスを書記長にPAP結成
1931年	1月、エンリケスが書記長を辞任、後任にコックス選出 8月、アヤ・デ・ラ・トーレ帰国 10月、大統領選挙でサンチエス・セロ当選

2. 1920年代におけるアヤ・デ・ラ・トーレの足跡

(1) 海岸部北部における社会構造変化

ペルーの海岸部（コスタ）北部の太平洋岸に流れ込む多くの河川の流域には、植民地時代より農耕地され、前資本制的な労働制度に基づく中小規模土地所有制が発展してきたが、1979～83年に発生した太平洋戦争におけるペルーの敗北後、砂糖生産の国際市場への統合が進展するに伴って、外国資本の流入が顕著になり、資本主義的経営の大土地所有制が拡大した。

クラレーンは、19世紀末から20世紀初頭にかけて、海岸部北部において拡大した大土地所有の農園として、ラ・リベルタ県トルヒーヨ地方

のカサ・グランデ農園（ドイツ系のイルデメイステル家所有）、カルタビオ農園（イギリス系のグレイス家所有）、ロマ農園（イタリア系のラルコ・エレラ家所有）、ラレド農園（チョピテア家所有）等、ランバイケ県チクラーヨ地方のトゥマン農園（パルド家所有）、プカラー農園、パタボ農園、ポマルカ農園、アスマンドラル農園（ガジョソ家所有）、カヤルティ農園（アスピヤガ家所有）アンカシュ県チンボテ地方のタンボ・レアル農園（イギリス系のローン家所有）等を挙げている。

カサ・グランデ農園の収穫量は1859年に250 ファネガダ（1 ファネガダの収穫について 64a を必要とする）であったのが、その後拡大して1918年には7216 ファネガダに、1927年には1万3460 ファネガーダ（約 7610 ha に相当）に拡大した。

また、ロマ農園は1850年には500 ファネガダであったが、1918年には6244 ファネガダに拡大し、その後カサ・グランデ農園に吸収された [Klarén 1973: 17–21]。

このような大土地所有制の拡大により、周囲の中小農は土地の抵当化などを通じて土地を喪失し、大土地所有制がさらに拡大した。また、これらの大土地所有制の大農園では、土地を喪失した周辺の旧独立中小農や山岳部北部の農村から流入した先住民農民が雇用され、前資本制的な「エンガンチェ」と呼ばれる労働制度によって大農園に縛られていた。また、これらの 大農園では、法定通貨で賃金が支払われるのではなく、農園内でのみ通用した商品券が支給され、それらの商品券は農園所有者が設営した農園内の売店でしか通用しなかったために、被雇用者は消費の面でも農園の拘束されていた。その結果、大土地所有制の大農園は、国内経済との結びつきをもたない「飛び地経済」を形成し、そのため農園の周囲の町村においては、商店主の多くが大農園で働く労働者層が農園内の売店で輸入品を中心とした商品の購入を行うために消費者層を失

って没落した。

このようにして、資本主義的な大土地所有制が拡大した海岸部北部地方においては、旧中小独立農や旧商店主のような旧中間層が没落し、体制批判的な運動に吸収される社会的基盤を形成していった。このような急進化した旧中間層は専門商業家層（弁護士、医師、会計士、ジャーナリスト等）の指導の下に反体制運動の一端を担い、海岸部北部出身であるビクトル・ラウル・アヤ・デ・ラ・トーレ（1895～1979）らの知識人の指導下に結集していったのが、アプラ運動の一国党としてのPAPであった。PAPは、1931年の結成以来、海岸部北部を「強固な北部」と呼ばれる伝統的な支持基盤としてきた。

このようにアプラおよびPAPは、海岸部北部における19世紀末以降の資本主義システムの浸透を背景として形成された運動であり、この海岸部北部の拠点を出発点として、その後同様の経緯をたどった海岸部南部や山岳部の中間層を中心とした階層に基盤を拡大して成長していくと評価される。

(2) ペルー追放まで

アプラ運動およびPAPは、いずれもアヤ・デ・ラ・トーレを創立者とする。アヤ・デ・ラ・トーレは、1895年2月22日にラ・リベルタ県トルヒヨ市に植民地時代の名家の子孫である元大土地所有者の家庭に生まれた。両親はラウル・エドムンド・アヤ・デ・カルデナス（1862～1934）とソイラ・ビクトリア・デ・ラ・トーレ・イ・ウラカ・デ・カルデナス（1864～1948）で、二人は従兄妹であった。ラウル・エドムンドは太平洋戦争に従軍したあと、文芸志向が強かったこともありトルヒヨに新聞社を設立した人物であり、1894～95年の内戦時代には弟サムエルとともにカセレス派に属した。ビクトル・ラウルは長男であり、弟に

エドムンドとアグスティン、妹にソイラとがいた。

父方のアヤ家は18世紀にコスタリカ総督となってアメリカ大陸に渡航してきたバスコ系のカハマルカ県内の土地所有者の家系であり、植民地時代に伯爵であったメシア家と遠戚関係にあった。母方のデ・ラ・トーレ家はピサロに従ったガヨ島の13人の一人であったファン・デ・ラ・トーレの子孫であった。デ・ラ・トーレ家の祖父アグスティン・デ・ラ・トーレ・ウラカ・イ・サエンス・デ・サラテが祖母フランシスカ・デ・パウラ・デ・カルデナス・イ・カリリョと再婚したが、初婚期の子息（母親ソイラ・ビクトリアの異母兄）がレギア政権の第二副大統領となったアグスティン・デ・ラ・トーレ・ゴンサレスである。デ・ラ・トーレ家はラリベルタ県内のチカマ地方に植民地時代からガリンド農園を有していたが、19世紀後半にヘロニモ・デ・ラ・トーレが同農園を新興のチャピテア家に売却したため同農園はラレド農園の一部となつた。このことからデ・ラ・トーレ一族は大土地所有の拡大に批判的な姿勢を有していたと言われる。また、母方の祖父の妹であるロサリオ・デ・カルデナス・イ・カリリョは19世紀に副大統領であったペドロ・アレハンドロ・デル・ソラルと婚姻していた。いずれにせよ、父方のアヤ家も母方のデ・ラ・トーレ家もトルヒヨ地方における没落しつつある名家であったと言える。

アヤ・デ・ラ・トーレは国立ラ・リベルタ大学文学部で学んだあと、1917年に首都リマの国立サンマルコス大学法学部に進学し、1919年10月にはペルー学生連盟議長に選出され、労学連携運動の中心となつていった。1919年7月4日に発生したクーデターを経て9月24日にアウグスト・B. レギア（1863～1932）政権が発足した際、伯父のアグスティン・デ・ラ・トーレ・ゴンサレスが副大統領であったこともあり、レギア政権発足に協力したほか、当初は同政権を支持したが、その後レギア

政権の保守化に伴ってアヤ・デ・ラ・トーレが指導する労学連携運動とレギア政権の関係が決裂するに至り、アヤ・デ・ラ・トーレは反レギア姿勢を強めていった。

1921年1月22日にはリマにおいてペルー学生連盟の指導下に労学連携を具体化するゴンサレス・プラダ人民大学が設立されたが、アヤ・デ・ラ・トーレは人民大学学長に就任し、名実ともに労学連携の要の役割を果たした。また同年6月にはゴンサレス・プラダ人民大学の機關紙的役割をもつ『クラリダ Claridad』誌を発行して急進的前衛世代である「新しい世代」による情宣活動の中心となった。アヤ・デ・ラ・トーレが急進化する一方で、レギア政権は1923年5月23日に保守主流派への妥協を図ることを目的として「キリストの心に捧げる」式典を挙行したが、これに対して労学連携運動が抗議行動を起こして死亡者2名を出す街頭騒擾事件に発展、その際レギア政権はゴンサレス・プラダ人民大学学長であったアヤ・デ・ラ・トーレを首謀者として指名手配した。アヤ・デ・ラ・トーレは10月上旬に逮捕され、国外追放処分に付された。

(2) ヨーロッパ滞在とアプラ運動の結成

アヤ・デ・ラ・トーレは、1923年10月9日に追放地となったパナマに到着してアルベルト・ルイス・ロドリゲス・パナマ学生連盟議長の出迎えを受け、その後10月31日にはキューバに到着、11月3日にはホセ・マルティ人民大学設立式に出席した。さらに、11月16日に当時メキシコの公共教育相であったホセ・バスコンセロス・カルデロン（1882～1959）の招きによってメキシコに到着した。メキシコではバスコンセロスから文化普及・農村教育振興計画の作成プロジェクトへの参加を求められた。

アヤ・デ・ラ・トーレは、1924年4月10日に挙行されたメキシコ革

命の英雄であるエミリアーノ・サパタ追悼5周年記念集会に出席し、メキシコ革命を「モデルを持たない20世紀最初の社会運動である」と称揚するなどメキシコ革命との一体感を示した。また、同年5月7日にはレロ・デ・ラレア・メキシコ学生連盟に対して「新しい世代」の精神を表現する「インドアメリカ」（アプラ運動が用いた先住民系を含めた米州を表現する用語）を象徴する旗をペルー学生連盟議長として手渡す儀式をとり行った。PAPの正史においては、この儀式をアプラ運動の結成として写真入りで紹介されることが多い¹⁾。しかし、この儀式はアヤ・デ・ラ・トーレが個人的に友人であるメキシコ人学生のホセ・アンヘル・セニセロスが準備した「インドアメリカ」の旗が「新しい世代」の連帯を象徴する儀式としてアヤ・デ・ラ・トーレからメキシコ学生連盟に手渡されたにすぎず、具体的な思想的内容を持つ運動が結成されたことを意味するものではない。この儀式が象徴したものとは、メキシコ革命、そしてペルー、キューバ等で開始された人民大学運動に代表されるラテンアメリカ全体に共通して発生しつつあった急進的前衛世代である「新しい世代」の意識であった。

1924年5月、アヤ・デ・ラ・トーレはメキシコを出国し、6月に米国で組織されたキリスト教系・無党派系学生のソ連訪問団の一員に加わり、リマ地方労働者連盟（FLOL）のリカルド・カセレス書記長で発行した信任状を携行して訪ソした（メキシコは同年8月4日にソ連を承認）。FLOLからは「ペルーの前衛の代表としてソ連の実情を調査し報告すること」が任務として課せられた。また、メキシコの雑誌『絵入りウニベルサル Universal Gráfico』から10年間の特派員契約も取得した。アヤ・デ・ラ・トーレ一行がソ連に到着した時、コミニテルン（共産主義インターナショナル）の第5回大会が開催されており、アヤ・デ・ラ・トーレたちはオブザーバーとして出席した。また、7月15日に開催さ

れた青年共産主義者世界会議にも出席した。訪ソ中、アヤ・デ・ラ・トーレは肺結核の初期症状を呈したため、同年9月にソ連教育人民委員であるアナトリー・ルナチャルスキイ（1875～1933）からロマン・ロラン宛の紹介状を取得してスイスに向けて出国した。

9月27日、アヤ・デ・ラ・トーレはレニングラードを発してスイスに向かった。アヤ・デ・ラ・トーレは1928年4月に執筆した（出版は1936年）『反帝国主義とアプラ』の中で、「モスクワにおいて私が得た第一印象は、ロシアにおいて見られたインドアメリカに関するものたれていたほぼ完全な無知であった」と記し、ソ連に関して否定的な印象を述べているが、この著作はアヤ・デ・ラ・トーレが国際共産主義運動と決裂した後の時期に出版されている事実を考慮すべきであろう。逆に、アヤ・デ・ラ・トーレと1925年1月にイタリアのジェノバで会見したパルミロ・マキャベロ在ジェノバ・ペルー総領事とセサル・ファルコンは、アヤ・デ・ラ・トーレが熱烈なソ連礼賛とマルクス主義賛美を行っていたと証言している。この点にも、アプラ運動による歴史的な捏造が見られる。即ち、国際共産主義運動と決別したアプラ運動は、アヤ・デ・ラ・トーレが訪ソ時からソ連や国際共産主義運動に失望していたとの、歴史的事実の修正を行ったと考えられる。

アヤ・デ・ラ・トーレがスイス滞在中にペルーで発生したサムエル・デ・アルカサル大佐による武装蜂起未遂事件に関連して、レギア政権がアヤ・デ・ラ・トーレがこの未遂事件に連座したとしてスイス検察庁に身柄拘束を依頼し、同国官憲が旅券等の携行品の押収を行うなどの弾圧を行った。このため、1925年1月にアヤ・デ・ラ・トーレはイタリアに脱出し、ミラノ、ベネチア、ナポリを歴訪した後、2月22日にパリに到着し、その後ロンドンにわたってロンドン・スクール・オブ・エコノミックスに入学した。

アヤ・デ・ラ・トーレのロンドン滞在中に、アプラ運動の実質的な形成に向けて重要な出来事が発生した。同年6月に米国がメキシコに対する内政干渉を行おうとする事件が発生し、6月29日にパリにおいてラテンアメリカ出身の知識人やスペイン人知識人の緊急抗議集会が催され、アヤ・デ・ラ・トーレもロンドンから駆けつけて集会に出席した。この集会は「反帝国主義」を訴える集会になったが²⁾、集会にはスペインのミゲル・ウナムノ（1864～1936）、ホセ・オルテガ・イ・ガセット（1983～1955）、メキシコのバスコンセロス、グアテマラのミゲル・アンヘル・アストゥリアス（1899～1974）、ウルグアイのカルロス・キハーノ（1900～1984）、アルゼンチンのマヌエル・ウガルテ（1875～1951）等が参加して発言した。この集会が、アヤ・デ・ラ・トーレが「反帝国主義」を掲げる統一戦線的な運動としてのアプラ運動を結成する上で重要な出来事となったものと思われる。アヤ・デ・ラ・トーレはこの集会において、「我々の戦いは内外の敵に対して行われねばならない。帝国主義の重要な計画の一つは我々を分断することである。統一し、連邦化したラテンアメリカは、世界で最も強力な連邦の一つを形成し、ヤンキー帝国主義にとって脅威とみなされるだろう。（中略）自由を求めて戦うラテンアメリカ諸人民の唯一の道は、内外の敵に対して団結することである」と発言した〔Haya de la Torre 1977a: 76–79〕。この時期に、アヤ・デ・ラ・トーレにはアプラ運動の思想的基盤が形成されていたと見ることができよう。

（3）国際共産主義運動との決別

1927年1月22日、ニカラグアのサンディエゴによって行われていた反帝国主義闘争に連帯する目的で、アヤ・デ・ラ・トーレはパリに居住

するペルу人留学生たちとともに最初のアプラ運動の具体的実態となつたアプラ・パリ支部の会合に参加加した。集会に参加したのは、フェリペ・コシオ・デル・ポマル（1889～1981）、セサル・バジエホ（1892～1938）、エウドシオ・ラビネス（1897～1971）等の他、ルイス・エドゥアルド・エンリケス、レバサ、（エドガルドとウイルフレッドの）ロサス・レカロス兄弟、（ラファエルとアルフォンソの）ゴンサレス・ウィリス兄弟、ヘラルド・ロアイサ、ゴンサロ・ガマラ・カジエル等のクスコ出身者であった。

その後、アプラ支部がペルу国内のクスコやリマの他、ブエノス・アイレス、メキシコ、ラ・パス、キューバの各地に設立されたが、メンバーの大半はペルу人亡命者や留学生たちであった。サンチェスは、この日の集会は1926年前半に既に結成されていたアプラ・パリ支部に「アプラ反帝国主義研究センター」を設立することが目的であり、集会にはペルу人の他、中国国民党の代表（Sia Tin 中華民国国連代表）、ハイチ、ニカラグア、ドミニカ共和国の代表が参加したと主張している[Sánchez 1980: 155]。この集会のアプラ運動史上における意味合いがアプラ運動の形成時期に関する考察において重要となる。

PAPの正統派を代表するサンチェスは、1954年に出版した『アヤ・デ・ラ・トーレとアプラ』において、「1925年末あるいは1926年1月にアプラ・パリ支部の最初の夕食会が催された」と述べている[Sánchez 1980: 15]。しかし、他のアプラ関係者の文献にはこのような記述は見られない。また、サンチェス自身が、1934年に出版した『アヤ・デ・ラ・トーレまたは一政治家』において、「1926年末にアヤ・デ・ラ・トーレはパリに戻りアプラ委員会を設立した」と記しており[Sánchez 1979: 134]、サンチェスの両著書には明らかに矛盾が存在する。

他方、アヤ・デ・ラ・トーレが1926年4月15日に、後にアプラ・メキシコ支部書記長となるエステバン・パブレティッチに宛てた書簡の中で「我々が形成すべき反帝国主義統一戦線は、いかなる既存の派閥に奉仕するものではなく、ラテンアメリカの労働者階級に奉仕するものである」と述べた上で、「私はアプラの組織化に向けて努力している」、[Planas 1986: 140–141] と述べている。従って、少なくとも1926年4月時点ではアプラ運動は結成されていなかったことは確実であり、また「アプラ」という言葉が見られるのは、筆者の現在までの調査に拠れば、この書簡が最初である。さらに、1926年中にドミニカ共和国のフリオ・コエジョに宛てた書簡の中で、ラテンアメリカにおける反帝国主義運動の形成に関して述べた部分において、反帝同盟について述べた上で、「戦いの重大さ、明白にラテンアメリカで、刷新的あるいは革命的で、効果的な性格を与える必要性がより広汎で完璧な組織の形成を求めている。すでにそれは組織されつつある。それは“ラテンアメリカの肉体的・知的労働者の統一戦線であるアプラである”と記している。問題はこの書簡が発出された時期について、『アヤ・デ・ラ・トーレ著作集第1巻』には詳細な説明はなされていない。パブレティッチ宛て書簡に見られた「組織化に向けて努力している」との表現、コエジョ宛て書簡に見られた「組織されつつある」との表現は、アプラが既に結成されたことを意味するのではなく、組織化に向かっていると解釈すべき表現である。種々の事実から判断するに、アプラ・パリ支部が1927年1月までに結成されていた可能性が大きい。

また、アプラ・パリ支部の結成に参加したコシオ・デル・ポマルは、1961年に出版した『ビクトル・ラウル』において、「カルティエ・ラタンのレストランで行われた夕食会で最初のアプラ支部の設立が挙行された」と述べているが、この夕食会の実施時期については明記していない

[Cossio del Pomar 1962: 268]。他方、アヤ・デ・ラ・トーレは、「11月2日にアプラのヨーロッパにおける活動を指導する最初のペルー人青年たちのグループが結成されたばかりのパリから帰った時、『アマウタ』の第1号を見つけた」と述べていること [Haya de la Torre 1997a: 115-116]、ラビネスが1926年10月末にブエノス・アイレスからパリに到着し、パリ支部の結成に参加していることから、パリ支部の結成は1926年10月末から11月2日までの間の時期であったことは確実である。

次に、アプラ運動の思想的・綱領的内容に関してはアヤ・デ・ラ・トーレは、1928年4~5月に執筆した『反帝国主義とアプラ』の中で、1924年12月にアプラの綱領が策定されたと述べているが、そのような綱領は1926年11月に発行されたイギリスの『ザ・レイバー・マンスリー The Labour Monthly』にアヤ・デ・ラ・トーレが掲載した「最大限綱領」以前には見当たらない。同誌の掲載した論稿「アプラとは何か」の中でアヤ・デ・ラ・トーレは次の5点を「最大限綱領」として掲げた。

- (イ) ヤンキー帝国主義に対する行動。
- (ロ) ラテンアメリカの政治的統一。
- (ハ) 土地と産業の国有化（民族化）。
- (ニ) パナマ運河の国際化。
- (ホ) 全世界の被抑圧人民・被抑圧階級との連帯。

この綱領が策定されたのは、1926年10~11月頃であったと見られるが、アヤ・デ・ラ・トーレは、『反帝国主義とアプラ』の中で、アプラは1927年2月にブリュッセルで開催された反帝国主義国際会議においてその姿勢を決定し、「外国からの干渉も影響も受けないラテンアメリカ独自の運動である」と表明したと記している。従って、アプラが明確な姿勢を表明できるようになったのは、1927年2月であったとすれば、

綱領が策定されたのはその直前の時期であったと判断すべきであろう。

上記のような関係者や研究者の表明を考慮すれば、構想はともなくとして、内容面および組織面でのアプラ運動の結成時期は、アヤ・デ・ラ・トーレは『反帝国主義とアプラ』の中では、「アプラは綱領の総論的5項目が策定された1924年12月に結成された」[Haya de la Torre 1977b: 74]と述べている一方で、1926年12月に発行された『アマウタ』第4号に掲載されたホセ・カルロス・マリアテギ宛て書簡において、「ヨーロッパにおけるアプラの活動を指導する若いペルー人の第一のグループが結成されたばかりのパリから1926年11月2日に（ロンドンに）戻った」と記していることを考慮すれば³⁾、前述の通り、1926年10月末から11月2日までの間であったと判断される。

(4) 国際共産主義運動との決別

1927年2月10日から23日までブリュッセルで開催された反帝国主義国際会議は、コミニテルンの指導下で1924年に組織された反帝国主義同盟が主催した国際会議であり、孫慶齡（1893～1981、孫文未亡人）、マクシモ・ゴーリキー（1968～1936）、アンリ・バルビュス（1973～1935）、片山潜（1859～1933）、ジェームズ・マクストン（1885～1946）、ジョージ・ランズベリー（1859～1940）、ロマン・ロラン（1866～1944）、レオン・ブルム（1872～1950）、バスコンセロス、ウガルテ、キハーノ、アントニオ・メージャ（1903～1929）、ビットリオ・コドビージャ（1884～1970）等が参加し、ペルー人としては当初、アルゼンチンの反帝同盟の委任状を取得したエウドシオ・ラビネス（1897～1971、後にペルー共産党PCP書記長）だけが招待されており、アヤ・デ・ラ・トーレもアプラ運動も招待されていなかった。このため、1926年末にブエノス・アイレスから渡欧して、反帝国主義国際会議にブエノス・アイレ

スの反帝同盟の代表として参加したラビネスが奔走してアヤ・デ・ラ・トーレも招待されることになり、会議では演説も行った。

アヤ・デ・ラ・トーレは『反帝国主義とアプラ』において、「アプラは公式には招待されなかつたが、個人的にはアリストたちは幾人かの著名なインドアメリカの知識人とともに特別に招待された」と述べている [Haya de la Torre 1976b: 86]。アヤ・デ・ラ・トーレは、反帝同盟から当初は招待されていなかつたことに相当立腹し、プライドを傷つけられたようである。この会議においては、ラテンアメリカからの参加者の中で、アヤ・デ・ラ・トーレと、既にコミニテルンの影響下にあったメージャ、コドビージャ、キハーノらとの間に路線の対立が生じた。ラビネスがコミニテルン路線寄りの姿勢を探るようになるのは1929年の訪ソ後である。

アヤ・デ・ラ・トーレが、このブリュッセル反帝国主義国際会議から得た失望は、反帝同盟は帝国主義に対する抵抗運動において重要性をもつべきものとされつつも、政治的指導は各国共産党に委ねられるべきとの方向性が示されたことに発し、換言すれば、ラテンアメリカにおけるアプラの政治的重要性が無視された点にあったと見られる。ここからアプラ運動がアヤ・デ・ラ・トーレの指導下に国際共産主義運動とは異なる路線を採り始めることになる。アヤ・デ・ラ・トーレは『反帝国主義とアプラ』の中で、「国際共産主義運動にとってはスターリン正統派の第三インターナショナルの公式党以外に左翼党は存在しない。1927年のブリュッセル会議後、それはアプラであった」と記し、ブリュッセルの反帝国主義国際会議が国際共産主義運動とアプラ運動と間の分岐点となったと述べている [Haya de la Torre 前掲書: 87]。

(5) 「メキシコ計画」

アヤ・デ・ラ・トーレはブリュセルの反帝国主義国際会議出席の後、ロンドンに戻ったが、同年8月1日にロンドンを離れ、パリを経由して、9月中旬にニューヨークに到着した。ニューヨークで複数回の講演を行った後、11月16日に米国を発してメキシコに着いた。メキシコではバスコンセロスの尽力で公共教育省の古典作品出版部門に職を得た。その一方で、先にヨーロッパから帰着していたキューバ人共産主義者のメージャやメキシコ共産党がアヤ・デ・ラ・トーレとアプラ運動に対する批判を展開したため、アヤ・デ・ラ・トーレはメキシコ・シティおよびその周辺で講演活動を行う一方で、1928年4月に発行されたメージャが執筆したパンフレット『アルバとは何か?』に対する反論として、同年4~5月に『反帝国主義とアプラ』を執筆した。メージャは、「アプラは日和見主義とラテンアメリカ改良主義の組織的意図を代表する」とアプラを批判していた。

アヤ・デ・ラ・トーレのメキシコ滞在中の1927年末にペルー人学生のパブレティッチを書記長としてアプラ・メキシコ支部が結成されている。1928年1月22日には、アプラ・メキシコ支部によって「メキシコ計画」が策定された。「メキシコ計画」は15項目から成り、アヤ・デ・ラ・トーレのペルー帰国を目指して、アプラのペルー一国党である「民族主義解放党 Partido Nacionalista Libertador」および「民族主義解放軍 Ejercito Nacionalista Libertador」の結成を図ろうとするものであった。具体的には、ENLが北部のタララに上陸して軍事行動を開始するとともに、1929年3月に想定されていた大統領選挙にアヤ・デ・ラ・トーレを立候補させてレギア政権打倒を図ろうとする計画であった。署名者は、カルロス・マヌエル・コックス、マグダ・ポスタル、バスケス・ディアス、パブレティッチ、デラフイン・デル・マル、ニコラス・

テレロス、ハコボ・ウルヴィッツ等であった。この「メキシコ計画」が、ペルー国内のアプラ運動を分裂させ、マリアテギらの社会主義者グループとの決別をもたらすものとなる。

その後、アヤ・デ・ラ・トーレはニカラグアのアウグスト・サンディーノ（1895～1934）の指導下で展開されていた反帝国主義・民族解放闘争を支援するために中米諸国を訪問することや、ペルーでの大統領選挙への出馬を射程に入れたペルー帰国を準備し始めた。同年6月、アヤデ・ラ・トーレはメキシコを発してグアテマラに入国した。8月22日に同国官憲によって身柄を拘束されてエル・サルバドルに出国させられ、エル・サルバドルでは、同国陸軍の教官をしており、後にペルー帰国計画である「メキシコ計画」において「民族主義解放軍」司令官になる予定であった旧友のフェリペ・イパラギーレと「メキシコ計画」やサンディーノ支援について議論している。しかし、9月11日に同国治安部隊が身柄拘束を図ろうとしたため、アヤ・デ・ラ・トーレはコスタリカに脱出し、12月12日まで同国に滞在した。11月12日にはアプラのコスタリカ支部が、以前からアヤデ・ラ・トーレと親交のあった『レポルトリオ・アメリカノ Repertiro Americano』編集長であるホアキン・ガルシア・モンヘを中心として結成されている。

12月12日にアヤ・デ・ラ・トーレはコスタリカを出国しパナマに向かったが、バルボア港でパナマの官憲がアヤ・デ・ラ・トーレの上陸を許可しないばかりか、乗船していたハンブルグ・アメリカ・ラインの「フェニシア」号はバルボアには停泊せず、次の停泊地であるブルーメンに向かうことが決定された。こうして、アヤ・デ・ラ・トーレは強制的にアメリカ大陸からヨーロッパに身柄を移送されることになり、12月下旬にベルリンに到着した。アヤ・デ・ラ・トーレに対する強制移送には米国政府とパナマ政府が関与していたとされる。

このようにアヤ・デ・ラ・トーレは、ブリュッセルの反帝国主義国際会議を契機として国際共産主義運動と決別してラテンアメリカ独自の変革運動を具体的に展開し始めた矢先に、米国政府等の介入によって活動を中断され、ペルー帰国計画の一時延期を強いられる事になった。この間、コミニテルン側からは何度も慰留の働きかけが行われている。その窓口になったのは、1924年にアヤ・デ・ラ・トーレが訪ソした際に知り合ったアブラモビッチ・ロゾフスキイ（1872～1952）であった。プロフィンテルン（赤色労働組合インターナショナル）議長であったロゾフスキイは、1926年11月頃（『ザ・レーバー・マンスリー』に論稿「アプラとは何か」が掲載された後）にアヤ・デ・ラ・トーレ宛てに書簡を送り、アヤ・デ・ラ・トーレに拠れば、「新しい組織（筆者注：アプラ運動を指すと思われる）を歓迎する」と述べた上で、「インドアメリカの諸人民が米国において持てる反帝国主義的な同盟者はブルジョア的もしくは小ブルジョア的な知識人でなく、労働者以外にはありえない」との趣旨を記述した「曖昧な」内容のものであったが、アヤ・デ・ラ・トーレを国際共産主義運動の中にとどめ置こうとする意図を感じさせるものであった [Haya de la Torre 1976b: 84]。

これに対してアヤ・デ・ラ・トーレは返信を認め、ラテンアメリカの社会的・経済的・政治的現実はヨーロッパとは異なることを説明し、「ヨーロッパからこれらの諸問題の魔術的処方箋を与えることは不可能であると主張した」と述べている [前掲書 85]。アヤ・デ・ラ・トーレの反論の主要点は、ラテンアメリカは資本主義システムの初期的な段階にあるために、ヨーロッパからの「魔術的処方箋」であるプロレタリア前衛党である共産党の指導性は適切ではなく、中間層の役割をも重視した統一戦線的なアプラ運動を基盤にする党の指導下に変革を目指すことが適切な路線であるという点にあった。それ故に、コミニテルンの指導

性を否定した。

アヤ・デ・ラ・トーレに拠れば、ロゾフスキーとの書簡の交換は数回に及んだらしい。そしてロゾフスキーとの往復書簡の一部が1928年3月にモスクワで開催されたプロフィンテルン第4回大会の席上で配布され、アヤ・デ・ラ・トーレとアプラの姿勢が批判された。これに対して、同大会にペルー代表として出席していたフリオ・ポルトカレーロがアヤ・デ・ラ・トーレを強く擁護する発言を行っている⁴⁾。

ロゾフスキーは、その後もアヤ・デ・ラ・トーレに対する説得を行おうとした。ポルトカレーロに拠れば、ロゾフスキーはプロフィンテルン第4回大会に出席したポルトカレーロに対して、もう一度アヤ・デ・ラ・トーレと直接に話す必要があるとして、ポルトカレーロがメキシコにいたアヤ・デ・ラ・トーレを連れて再度訪ソし、ペルー問題について話し合うことを提案した。ポルトカレーロは、ソ連を出国して1928年5月初め頃にパリに着き、事情をアプラ・パリ支部長であったラビネスに話した。その結果、ラビネスがメキシコにいたアヤ・デ・ラ・トーレに再度訪ソしてロゾフスキーと話すよう勧めた書簡を送り、ポルトカレーロも1ヶ月ほど待ったが、アヤ・デ・ラ・トーレからの返事は来なかった [Portocarrero 1987: 150–155]。

この時期、アヤ・デ・ラ・トーレはグアテマラに向けて出国寸前であり、ラビネスからの書簡が手元に届いたかどうか不明である。また、この時期は、後述するように、マリアテギがアヤ・デ・ラ・トーレを批判する書簡をメキシコ支部宛てに送り、アヤ・デ・ラ・トーレの返書がホセ・カルロス・マリアテギ（1894～1930）宛てに到着する直前の時期であり、アヤ・デ・ラ・トーレの国際共産主義運動とは決別するとの意思は固かったため、ロゾフスキーの説得に応じてアヤ・デ・ラ・トーレが再度訪ソする可能性はほぼなかったと推測される。

アヤ・デ・ラ・トーレのドイツ滞在中の1929年8月に、フランクフルトにおいて第2回反帝国主義国際会議が開催されているが、ペルー代表としては、ラビネスとウルヴィッツが参加しており、アヤ・デ・ラ・トーレおよびアプラには招待状は発出されなかった。

上記の事実を考慮するならば、アヤ・デ・ラ・トーレおよびアプラ運動が国際共産主義運動と決別したのは、1927年2月からアヤ・デ・ラ・トーレがロンドンを離れた同年8月までの間であったと判断できよう。その後、1929年5月16日にラビネスを書記長とするアプラ・パリ支部は解散され、その直後にエンリケスを書記長とする新パリ支部が結成されている。こうしてアプラ運動に参加しているペルー人亡命者の間にも、ラビネスやアルマンド・バサン等のコミニテルンとの関係を重視する社会主義者グループと、国際共産主義運動と決別したアヤ・デ・ラ・トーレ、エンリケス、コシオ・デル・ポマル等との間に決裂が生じることになる。

3. アヤ・デ・ラ・トーレの思想

(1) アプラの最大限綱領

1926年12月に発行された「ザ・レイバー・メンスリー」に掲載された「アプラとは何か?」の中に提示されたアプラ運動の「最大限綱領」に関して、アヤ・デ・ラ・トーレは次のように詳述している。「最大限綱領」である5項目である①ヤンキー帝国主義に対する行動、②ラテンアメリカの政治的統一、③土地と産業の国有化（民族化）、④パナマ運河の国際化、⑤全世界の被抑圧人民・被抑圧諸階級との連帯、であると提示した後に、「ラテンアメリカと米国との間の政治的・経済的関係の歴史、特にメキシコ革命の経験は、我々を次のような結論に導く」と述

べ、さらに、

- 「(イ) ラテンアメリカ諸国の統治諸階級である大土地所有者、大商人、ブルジョアジーは帝国主義の同盟者である、
 - (ロ) これらの諸階級は、大土地所有者、ブルジョアジー、大商人、およびそれらの諸階級の政治集団あるいは政治的カウディジョが帝国主義と交渉し、参加する利権、借款、その他の取引を手中にしている、
 - (ハ) このような階級同盟の帰結として、ラテンアメリカ諸国の天然資源は抵当化され、売却され、ラテンアメリカ諸国政府の金融政策は、大規模な借金の法外な継承を強いられ、雇用主のために生産しなければならない労働者諸階級は過酷に収奪されている。
- (二) 帝国主義へのラテンアメリカ諸国の経済的な漸進的な従属は、政治的従属、民族主権の喪失、帝国主義的な陸軍兵士や海兵隊員の武力侵略、クリオーヨのカウディジョたちの買弁化をもたらす。パナマ、ニカラグア、キューバ、サントドミンゴ、ハイチは、帝国主義の侵略政策の結果として、ヤンキーの植民地化あるいは保護国化されている」と論じている [Haya de la Torre 1977b: 129–132]。

ここで、気をつけねばならないことは、アヤ・デ・ラ・トーレは帝国主義的な現象が見られるのは、「パナマ、ニカラグア、サントドミンゴ、ハイチ」に限定されている訳ではなく、これら諸国は「植民地化あるいは保護国化」されているにすぎず、ペルー、チリ、ブラジル、アルゼンチン、コロンビア、エクアドルなどその他のラテンアメリカ諸国においても帝国主義的な現象がみられるとアヤ・デ・ラ・トーレは指摘していることである。

さらに、「アプラとは何か?」の最終部分でア・ヤ・デ・ラ・トーレは、「メキシコ、中米、パナマ、カリブ諸国の歴史的経験、および帝国主義の浸透が強く感じられるペルー、ボリビア、ベネズエラの現在の状

況は、完全に新しい基盤の上にアプラの組織を決定し、現実的で友好的な行動の方法を策定させた。アプラの主張は、疑いなく、危険な状態にある20の諸国人民の、社会正義の実現のため、ヤンキー帝国主義に対するラテンアメリカの政治的統一という切望を総合している」[Haya de la Torre 前掲書：135]と論じている。

これらの記述の中に、アヤ・デ・ラ・トーレのラテンアメリカ諸国の現状認識が読みとれるが、それはコミニテルンや反帝同盟の諸会議や文書において表現されていた帝国主義を告発する際の視角と大きな相違はない。

1927年2月10日から13日までブリュッセルで反帝国主義国際会議が開催された。この会議にはアプラ支部のエウドシオ・ラビネス（1897～1978）はブエノス・アイレスの反帝同盟の代表として出席したが、アヤ・デ・ラ・トーレは招待されていなかった。そのため、ラビネスが奔走してアヤ・デ・ラ・トーレも招待されることになったが、招待されていなかったという事実はアヤ・デ・ラ・トーレのプライドを傷つけたようである。彼は、反帝同盟の国際的な役割は否定しないが、反帝同盟はラテンアメリカにおいて政治的指導性をもつことはできないと主張して、ラテンアメリカではアプラ運動が唯一政治的指導性を發揮できる政治的運動であると主張していくようになり、反帝同盟の背景にいる国際共産主義運動とも決別していくことになる。

この反帝国主義国際会議が開催される前日の2月9日にアヤ・デ・ラ・トーレはキューバの友人たちに宛てた書簡を発している。その書簡の中で、アヤ・デ・ラ・トーレは「決定的で、明確で、真剣な、現実主義的な目的に向けた努力において分散的で、ヨーロッパの模倣的な、一方的な諸傾向を融解させることを意図するラテンアメリカの新しい革命勢力を、われわれは精力的に組織しつつある。（中略）アプラは、一言

でいえば、ラテンアメリカ人自身による米州の自由と、帝国主義および帝国主義の共犯者である支配諸階級に反対することを望んでいる」と書いている。即ち、反帝国主義国際会議の直前に、アプラ運動を反帝同盟や国際共産主義運動とは異なる運動として組織化しようとする意志を有していたことになる。アヤ・デ・ラ・トーレは、同じ書簡の中で、そのような運動のモデルとして中国国民党を挙げ、次のように述べている。

「われわれラテンアメリカの諸人民にとって、若き中国は絶好の例である。中国は、自らの力で再生し、中国人民の自由は中国人自身の功績である。行動を指導し、戦闘において闘い、革命によって獲得した国の大部分を統治している中国の革命青年の指導者たちは、人民の叛乱における意識を深く体得し、外国からの刺激を、それによって利用されることはなく取り入れる人々である指導者たちである。今日まで中国は外国人によって利用されてきた。国民党の運動は、あらゆる手段やあらゆる援助をこの目的のために使用しつつ、あらゆる従属から独立した運動を正当に代表するものである」[Haya de la Torre 前掲書：139-140]

アヤ・デ・ラ・トーレが中国国民党とコンタクトを持ったのは、1926年10月11日にロンドンの中国国民党事務所で開催された中国革命記念夕食会であったと思われる。この夕食会の席上での挨拶において、アヤ・デ・ラ・トーレは、「中国に起源を有する類似した反帝国主義統一戦線は、インドアメリカでは国民党と同様な類型の唯一の反帝国主義党は、結成されつつあるアプラである」と述べていた[Haya de la Torre 前掲書：105]。また、1927年1月22日にアプラ・パリ支部の主催で開催された「アプラ反帝国主義研究センター」の開所式に Sia Tin 中華民国国際連盟代表が出席していた。さらに、2月の反帝国主義国際会議には孫文の未亡人である宋慶齡が出席していたため、アヤ・デ・ラ・トーレは同会議において彼女と懇談した可能性もある。

この時期、中国では1926年7月1日に北伐が開始され、1927年4月12日に蒋介石による上海クーデターが挙行される直前の時期であった。同年7月13日には中国共産党が第一次国共合作の終了宣言を行うにいたる。従って、反帝国主義国際会議が開催されたのは、第一次国共合作が継続中の時期であり、中国国民党もその後の蒋介石の指導下で右傾化する前の国民党であった。即ち、アヤ・デ・ラ・トーレがイメージとして持っていたのは第一次国共合作時代の中国国民党であったという事実を確認しておく必要があろう。

アヤ・デ・ラ・トーレは、ブリュッセルの反帝国主義国際会議の後、1927年8月にロンドンを離れてメキシコに向かうまでの間に国際共産主義運動と決別する。そして、メキシコ到着後には、1928年1月22日にペルーにおいて大統領選挙に出馬することに伴って一国党の建設を目指した「メキシコ計画」を策定とともに、同年4月以後5月23日までに『反帝国主義とアプラ』の執筆を終える。

「メキシコ計画」は、アプラ・メキシコ支部が策定したものであり、15項目から成っており、アヤ・デ・ラ・トーレの大統領選挙への出馬のためのペルー帰国を目指して、アプラのペルー一国党である「民族主義解放党 Partido Nacionalista Libertador」（同計画の中では「ペルー革命的民族主義党 Partido Nacionalista Revolucionario Peruano の名称も用いられている）および「民族主義解放軍 Ejercito Nacionalista Libertador」の結成を図ろうとするものであった。同計画の中で主張されている諸点の中で、まず注目すべきは、前文において勤労者諸階級として「農民、労働者、および中間諸階級」という表現を用いている点であろう。1920年代のアプラ運動の主体としてこれら3階級が想定されていたことを示している。

また、第5項目には、土地所有の問題に関して「アプラが提案してい

る土地と産業の民族化を適用して、ペルーの民族主義的な解放運動の第一の経済的原則として、国の領域内に現存あるいは存在しうる資源は国民（nación）に属し、私的あるいは外国の利益に無条件に奉仕することで主権や人民のエネルギーを犠牲にすることなしに、開発あるいは開発させなければならないものは国民であることを宣言する」と記されている。この表現からも、アプラ運動の最大限綱領にある *nacionalización* は、「国有化」ではなく「民族化」と翻訳すべき言葉として使用されていることが理解される。そのことは、第6項目に「ペルーの民族主義解放運動は、働く者に土地を譲渡して、ガモナリズムを打倒して、抑圧の400年間を通じて維持されてきた先住民共同体の上に新しい国民的な農業・農牧業組織を再確立することに努めて、ペルー人民への土地の返還という原則を宣言する」と記していることからも確認される。第15項目には、運動の標語としてメキシコ革命においてエミリアーノ・サパタらの農民運動が掲げた「土地と自由」を採用すると述べている。[Planas 1986: 195–199]

このように「メキシコ計画」の中に、アプラ運動が有していた急進的な理念がかなり明らかに提示されていたと言える。特に、メキシコ革命のサパタとの精神的な一体化が示されていることを顕著な傾向として確認しておかねばならないだろう。

(2) 「反帝国主義国家」論

その後、アヤデ・ラ・トーレは、1928年6月にニカラグアのサンディエゴの闘いを支援するために中米諸国の歴訪を開始したが、その直前の5月23日までに、1920年代のアプラ運動の政治的路線を集約した『反帝国主義とアプラ』の執筆を終了している。しかし、この著作は1935年まで出版されておらず、1928年に執筆した内容が1935年版では

若干修正されている。従って、1935年版から1928年時点でのアヤ・デ・ラ・トーレの姿勢を完全に把握することはできないが、1920年代のアプラ運動の政治的路線の概略を知るために不可欠な資料であるため、分析の対象とする。

まず、『反帝国主義とアプラ』の特徴は、帝国主義段階の位置づけに関するである。アヤ・デ・ラ・トーレは、「ヨーロッパにおいては、帝国主義は資本主義の最後の段階であり——即ち、資本主義諸段階の継続の中での最頂点である——、資本の移動あるいは輸出や、市場と一時原料の生産地域の征服によって性格づけられる。しかし、インドアメリカではヨーロッパにおいては“資本主義の最後の段階”であるものが最初の段階になる。われわれの諸国においては、移動し輸入された資本は近代資本主義時代の最初の段階を提起する」と論じ、ヨーロッパとラテンアメリカ資本主義段階の違いを強調した〔Haya de la Torre 1977b: 89〕。この記述で明らかなことは、アヤ・デ・ラ・トーレは、帝国主義を批判しているものの、資本主義システムに関しては、必ずしも否定的ではないことである。これがアヤ・デ・ラ・トーレおよびアプラ運動に特徴的なラテンアメリカにおける資本主義システムの位置づけである。

アヤ・デ・ラ・トーレは、ラテンアメリカ諸国における資本家階層に関する、「インドアメリカにおいては、大土地所有階級に打倒するために十分に強力な、自立的で強大な民族ブルジョアジーを創出する時間を持ってこなかった」一方で、「大土地所有者階級の偶発的な根源である、初期的なクリオーヨのブルジョアジーは、その当初から帝国主義によって支配されて移植された。すべてのラテンアメリカ諸国においては、民族ブルジョアジーが現れる前に、移民的な資本主義である帝国主義が登場する」と論じている。アヤ・デ・ラ・トーレは、ラテンアメリカの資本家層は大土地所有者に起源をもち、帝国主義によって定着されたもの

であり、自立的な資本家層である「民族ブルジョアジー」とは言えない存在であると主張した。そして、このようなラテンアメリカにおける資本主義システムおよび資本家層に対する見方から、アヤ・デ・ラ・トーレの反帝国主義論は展開される。

アヤ・デ・ラ・トーレは、アプラ運動が一国的な政党にならなければならぬ理由に関して、「一階級に対する他階級の抑圧の道具である国家は、各国の支配諸階級の武器であり、生産諸階級を分断し、ラテンアメリカ諸国を維持するための帝国主義の武器と化している。政治権力は生産者によって奪取され、生産は社会化され、ラテンアメリカは諸国家連邦を設立しなければならない。これが、唯一帝国主義に対する勝利に向けた道であり、反帝国主義的な民族主義党であるアプラの最終的な政治的目的である」と述べている〔前掲書：88〕。要するに、アプラ運動は政治権力を奪取するためには一国的な政党にならねばならないと論じたのである。

次に、『反帝国主義とアプラ』において特徴的であるのは、メキシコ革命に対するシンパシーであり、巻末にはメキシコ憲法第27条および第123条のテキストが添付されており、この著作の主要論点である「反帝国主義国家」が主に同第27条に依拠して論じられる形となっている。

「反帝国主義国家」は『反帝国主義とアプラ』の第7章において論じられている。アヤ・デ・ラ・トーレは第7章の中で、ラテンアメリカにおいては左右のいずれの政治勢力においてもヨーロッパの政治思想の模倣が見られるが、それは精神的植民地主義に過ぎないと批判した上で、メキシコ革命に学ぶことを提唱する。そして、現在の革命後のメキシコの国家はいかなる国家であるのかと問い合わせ、既存の類別では捉えられない国家であると述べ、メキシコ革命は帝国主義の同盟者である大土地所有者層の利益を代弁するディアス政権を打倒したが、社会的な勝利は歴史

的には農民に勝利をもたらしたものの、裨益者は農民だけではなく労働者や中間階級も裨益者であった。従って、それは一階級の勝利を意味したのではなく、また社会主義革命であったのではなく、複数の階級による統一戦線によって実現された社会革命であったと論じる。そして、アヤ・デ・ラ・トーレは、このようなメキシコ革命のあり方がアプラ運動に示唆を与えると論じた。

アヤ・デ・ラ・トーテは、革命後のメキシコの10年余のプロセスは、国内的には1917年憲法に記載された規定を現実化していくとともに、対外的には帝国主義と圧力に抗していく闘いであったと述べ、それを遂行したのが「反帝国主義国家」であったと論じ、ラテンアメリカにおいてはメキシコ革命の教訓から、労働者、農民、中間階級からなる統一戦線によって形成されるインドアメリカ型の「反帝国主義国家」を建設して、国内的には大土地所有制の打倒を目指し、対外的には帝国主義による種々の圧力に抗しうる国家資本主義型の国家を建設しなければならないと論じた。さらにアヤ・デ・ラ・トーレは、この「反帝国主義国家」とヨーロッパの国家資本主義の違いは、ヨーロッパの国家資本主義は資本家階級の緊急措置であるのに対して、「反帝国主義国家」は「新しい社会組織への移行体制として国家資本主義を発展させる」ところにあると論じた〔Haya de la Torre 前掲書：161-171〕。また、別の表現では、「反帝国主義国家とは常に進歩する移行国家である」と表現されている〔Haya de la Torre 前掲書：180〕。要するに、「反帝国主義国家」とは、国家資本主義を特徴とするが、単なる一時的な緊急措置としてではなく、帝国主義によって資本主義が浸透されてきたラテンアメリカ諸国において資本主義を発展させていく「移行国家」として考えられていたのである。

さらにアヤ・デ・ラ・トーレは、「反帝国主義国家」が遂行する「社

会革命」は、「ブルジョア民主主義が掲げたものの中ではなく、機能的・経済的民主主義の階級的形態の基盤の上に」、帝国主義によって脅威を与えられるすべての諸階級を組織した党によって遂行されると述べる。アヤ・デ・ラ・トーレは、帝国主義によって脅威を与えられる諸階級の中に中間層を含めるが、ラテンアメリカにおける中間層は、ヨーロッパにおける中間層が封建的支配に対する闘争の段階を経てブルジョア支配に従属している従属層であるのに対して、大土地所有者とその背後にいる帝国主義に対する闘争性を有していると論じた。アヤ・デ・ラ・トーレの視角からは、中間層の最大の敵は帝国主義であり、その故に中間層は反帝国主義闘争において労働者や農民の同盟者となるとされたのである。

この『反帝国主義とアプラ』において顕著であることは、資本家層に対する政治的扱いである。アヤ・デ・ラ・トーレが主張した統一戦線は労働者、農民、中間層からなるものであり、資本家層を含むものではないと考えられるが、場所によっては「帝国主義によって脅威を与えられたすべての諸階級」という表現がなされていることから、民族ブルジョアジーである自立的な産業資本家層も含むものと理解される。しかし、『反帝国主義とアプラ』においては、ラテンアメリカにおいては民族ブルジョアジーが現れる前に、大土地所有者層に起源をもち帝国主義によって移植され資本家層が出現したと述べられている。そうであるなら、資本家層は統一戦線に含まれるのか否か必ずしも明確ではない。メキシコ革命においては、北部資本である自立的な民族資本家層が最終的に指導権を掌握したのであったが、アヤ・デ・ラ・トーレはメキシコ革命を労働者、農民、中間層の統一戦線によって達成されたとしか表現されていない。はたしてアヤ・デ・ラ・トーレは資本家層全般に対して否定的な政治的姿勢をとっていたのか。ここに1920年代末におけるアヤ・

デ・ラ・トーレの政治的思想に不明瞭な点がある。

しかし、不明瞭な表現は、アプラ運動の文書にも残されている。1929年7月25日付けで、ベルリンから発出されたアプラ運動事務局からパリ、ブエノス・アイレス、メキシコ、ラ・パスの各支部宛てに送られた覚書は（ベルリンには当時アプラ運動の組織的実態はなかったため、おそらくアヤ・デ・ラ・トーレが執筆したものと見受けられる）、「アプラは基本的に、一時的に中間諸階級と同盟関係にあるラテンアメリカの労働者・農民党であることを宣言する。この同盟はプロレタリアートが少数派であるとの理由だけでなく、アプラの最初の任務が、工業が未発達なラテンアメリカ諸国における資本主義の国際的な代表である帝国主義との闘いであるために、知識人の支援が必要であることによって絶対的に必要であることを宣言する。（中略）アプラは革命的で、それらの諸運動とは丁重な関係を維持するものの、ヨーロッパの諸運動にはいかなる従属もしない自立的な党である」との表現が見られる [Heysen 1977: XL]。この覚書に見られる不明瞭な点は、アプラの中間諸階層との同盟関係が反帝国主義闘争において「一時的」なものであると表現されている点、およびアプラが運動ではなく「党」であると表現されている点である。アプラが統一戦線的な運動であり、各国には一国党が必要であるとの主張に反することになる。このように、1920年代末の形成期にあったアプラ運動には、重要な側面において不明瞭な点が多い。

(3) 未公開書簡に見る政治的姿勢

前章で指摘したようなアヤ・デ・ラ・トーレの政治的姿勢の不明瞭さは、アプラ運動およびペルーの一国党であるPAPの姿勢にも現れている。アヤ・デ・ラ・トーレの全集（全6巻、1977年、メヒア・バカ社刊）に収録された諸著作やPAPの正史は、アプラ運動はアヤ・デ・

ラ・トーレのソ連訪問時から国際共産主義運動とは路線を異にしていたと主張してきた。また、マルクス主義、あるいはマルクス・レーニン主義的な運動上の方法論に関しても否定的であったと主張してきた。しかしながら、アヤ・デ・ラ・トーレの全集やPAPの正史では公開されてこなかった、彼が1926～29年までの間に執筆した書簡の中で、1927年2月から8月までの間であったと思われる国際共産主義運動と決別した後にも、アヤ・デ・ラ・トーレおよびアプラ運動がマルクス主義やマルクス・レーニン主義的な用語や方法論を捨ててはいなかったことを示す表現が残されている。アヤ・デ・ラ・トーレやPAPの正史によって公開されてこなかった書簡で、その後研究者によって公開されたものは、メキシコ・アプラ支部のエステバン・パブレティッチと、エウドシオ・ラビネスに宛てて書かれた書簡である。ラビネスは、ブエノス・アイレスからパリにわたり、パリ・アプラ支部の結成時には書記長となつたが、その後アプラ運動と袂を分かって国際共産主義運動に組みし、1929年中の訪ソを経て、1930年3月のペルー帰国後は、同年4月16日のマリアテギの死去の後、同年5月20日にペルー共産党初代書記長に選出された人物である。

アヤ・デ・ラ・トーレは、1926年4月15日付けでロンドンからメキシコにいたパブレティッチ宛てに送った書簡の中で、「問題は、そのように言うのではなく、共産主義者と名乗るのではなく、レーニン主義者と名乗るのではなく、そのように振る舞いながら、現実に共産主義者、マルクス主義者、レーニン主義者の性格をわれわれの運動に与えることである」と述べ〔Planas 1986: 140〕、アプラ運動は共産主義者やレーニン主義者を名乗ることなく、これらの方法を体現するのであると主張していた。さらに、同年7月10日付けのパブレティッチ宛ての書簡の中では「アプラは革命的に、あらゆるラテンアメリカの現実に適用可能な

革命的な諸戦術（レーニン、マルクス等）を用いて、ヨーロッパの方法とは絶対に異なる手段が闘争のために創出を求めているあらゆる新しい諸戦術を創造しながら闘う」と述べ [Planas 前掲書：158–159]、マルクスやレーニンの戦術を用いることを明言している。

また、1929年2月18日付けでベルリンからパリ支部書記長であったラビネスに宛てて送った書簡の中で、「アプラはマルクス主義である、何故なら現実主義的であるからであり、否定の否定を容認するからであり、すべての諸概念は内容なき言葉ではないことを知っているからである」と述べ [Planas 前掲書：223]、マルクス主義の有効性を主張した。

他方、1929年10月にベルリンからラ・パスにいたペルー人亡命者セサル・メンドサに送った書簡の中で、「アプラは共産主義の名称を名乗ることなく維持すべきである。このように実効的に革命的に活動しよう。名称や執着は何も意味しない。革命を準備しなければならない、それだけが唯一マルクス主義的であることである」と述べている [Planas 前掲書：66]。

さらに、1929年9月末に、再建されたアプラ・パリ支部書記長となったルイス・エドゥアルド・エンリケスに宛てた書簡の中で、アヤ・デ・ラ・トーレは、「アプラはラテンアメリカにマルクス主義を合体させることに努めていると繰り返すことは私の義務である。アプラの綱領はマルクス主義であり、それを認識するマルクス主義者のすべてがそれを認識している。その戦術はマルクス主義的であり、その体制は本質的にマルクス主義的である」 [Enríquez 1951: 39–40] と記している。

1926年から1929年末までの間にアヤ・デ・ラ・トーレが世界各地に点在するペルー人の同志たちに宛てた書簡で、それらの人々がその後アプラ運動から離反していったためにアヤ・デ・ラ・トーレやPAPが回収できなかった書簡から浮かび上がってくるアヤ・デ・ラ・トーレの政

治的思想は、要するに、マルクス主義的な用語を使うことなく、方法論的にマルクス主義を用いることを主張していたのであり、彼にとりマルクス主義的方法とは、政治権力を掌握するための武力闘争であり、政治闘争を実践する方法であることを意味したと考えられる。

(4) 「歴史的空間・時間論」

アヤ・デ・ラ・トーレの歴史哲学とでもいいうもので、1945年頃に具体化されることになるが、1935年に既にその始原的なものが表出されており、アヤ・デ・ラ・トーレの思想を知るうえで重要な「歴史的空間・時間論」なるものがある。これが、1935年に表出される以前に、1920年代からアヤ・デ・ラ・トーレによって抱かれていたか否かは判然としないが、重要な要素であるので、ここで取り上げておく。

1977年版『アヤ・デ・ラ・トーレ全集』第4巻には「歴史的空間・時間論」に関する論稿5本と対談3本が掲載されている。そのうち、最も早い時期に執筆あるいは作成されたものは、1935年にブエノス・アイレスの雑誌『クラリダ Claridad』に掲載された「アブリスモの哲学的概要」がアヤ・デ・ラ・トーレが「歴史的空間・時間論」を初めて提示した論稿である。アヤ・デ・ラ・トーレはその中で、「アブリスモは、マルクスの歴史的決定論とマルクスによって世界概念のために採用されたヘーゲルの弁証法を根こそぎにする」と述べ、相対論を提起する。そして、「現代的な相対論は3次元のユークリッド的諸原則を克服し、——物質、エネルギー、および重力の一つの新しい概念とともに——空間・時間と呼ばれる次元の4番目の継続性を発見し、人間の意識に新しく広大な地平を切り拓く」と論じて相対論を提示し、その相対論とは、「20世紀は新しい時間・空間、物質、エネルギーの概念に対応し、今や予想外までの宇宙の概念と理念化に向けて前進することは明らかであ

る」と述べているように、一つの理論はそれが該当する時代に対応するに過ぎず、絶対化することはできないとの主張にある [Haya de la Torre 1977b: 399–401]。このような歴史的相対化論とも呼びうる「歴史的空间・时间論」は、1945年5~6月に刊行された『クアデルノス・アメリカノス Cuadernos Americanos』第4年第3巻に掲載される「歴史的空间・时间論」において完成される。しかし、この「歴史的空间・时间論」の先駆的な考えは、少なくともアヤ・デ・ラ・トーレは1935年に表出し始めていたのであり、その目的は主にマルクス主義の地域的・時間的な有効性を相対化することにあった。要するに、アヤ・デ・ラ・トーレにとっては、いかにマルクス主義からの自立性を理論的に確保することができるかを示すことに重要性が置かれたのであり、それは1926~29年の時期においてマルクス主義や国際共産主義運動と極めて複雑で微妙な関係を持たざるをえなかつたアプラ運動が、示さなければならなかつた宿命ともいべき点であった。1930年代以後のアプラ運動においては、マルクス主義と国際共産主義運動の世界的普遍性と永久性をいかに否定するかに重点が置かれたのである。

4. アプラ運動と国際共産主義

前記の通り、アヤ・デ・ラ・トーレおよびアプラ運動は、1927年2月から8月までの間に国際共産主義運動と決別し、1928年4~5月には、アプラ運動がアヤ・デ・ラ・トーレの大統領選挙への出馬を目的としてペルーの一国党の結成を目指して「メキシコ計画」に着手しようとしたことから、リマのマリアテギらの社会主義者グループや、アプラ・パリ支部のラビネスらのグループとも決別することになった。

マリアテギらは、1928年10月にペルー社会党（PSP）を結成し、ア

プラ運動と袂を分かつ一方で、1929年6月にブエノス・アイレスで開催された第1回ラテンアメリカ共産党会議においてコミニテルン（共産主義インターナショナル）とも路線の相違を生じて、独自路線を歩むことになった。原因は、コミニテルンがプロレタリアートの前衛党を建設すべしと主張したのに対して、マリアテギらはPSPを大衆的な労農党として組織化を進めようとしたことにあった。他方、アヤ・デ・ラ・トーレおよびアプラ運動は、前章において示したように、労働者、農民、中間層からなる統一戦線党を目指した。このように、コミニテルン、マリアテギらのPSP、アプラ運動は、帝国主義が浸透する状況下における社会変革のあり方、特に党のあり方に関して、ラテンアメリカにおいてそれぞれ異なる路線をとることになる。さらに、ペルーの山岳部南部のクスコ地方においては、クスコ・アプラ支部から共産主義細胞が形成されたものの、マリアテギらのPSPとは異なって、コミニテルンの路線下で共産党結党を目指す路線をとった。

このような帝国主義の浸透が進展する中で、社会変革を目指す初期的な大衆運動の形成過程において種々の方向性が示される結果となった。

その後、PSPは1930年4月16日にマリアテギが死亡し、後を託されて同年3月にPSP書記長に選出されていたラビネスがマリアテギの死後の5月20日にPSPをコミニテルンの路線に従うペルー共産党（PCP）に再編して書記長となり、コミニテルンの路線下で左翼展開路線をとり、アプラ運動との共闘も不可能な路線をとるようになる。

一方、アヤ・デ・ラ・トーレおよびアプラ運動が、1928～29年に実行しようとした「メキシコ計画」は、1929年12月に中米・パナマ訪問中のアヤ・デ・ラ・トーレが、ドイツに送られたことから、一時的に頓挫した。しかし、アプラ運動は、1930年2月にパリ支部書記長であったエンリケスをボリビアを経て、ペルー南部に潜入させて、リマ支部お

より一国党の結成に向けた活動を進めたが、エンリケスがクスコで身柄を拘束されたため、一国党の結党は遅れた。その後、1930年8月にレギア政権がサンチェス・セロ中佐らのクーデターによって打倒され、エンリケスらも釈放されて、同年9月PAPを結成し、1931年10月に予定された大統領選挙に立候補するため、同年8月にアヤ・デ・ラ・トレが8年ぶりに帰国して選挙運動を開始したことによって、PAPは本格的な党活動を展開することになった。

PAPは、コミニテルンやPCPとは対立する路線はとったものの、本稿で検証した通り、労働者、農民、中間層の統一戦線党として極めて急進的な、特に行動面において武力革命を目指す路線をとったため、大土地所有者層を中心とする寡頭支配層および彼らの利益代弁者であった軍部と激しく対立することになる。そのような軍部との対立は、1930年代から始まって、1970年代後半まで持続されることになり、PAPは最大の基盤である海岸部北部を中心に選挙において恒常に25~35%を得票する政治的基盤を持ちながらも、1985年まで一度も政権に到達できないという結果をもたらした。

5. おわりに

前記2(1)で示した通り、アプラ運動の形成には、19世紀末以降の海岸部北部における砂糖生産の国際市場への統合の結果として大土地所有制が拡大し、旧中間層である中小独立自営農、小商人層が没落したこと、およびそれらの大土地所有制の農園において山岳部北部から移動してきた先住民を労働者として経済外的強制を伴う過酷な労働環境を強いたことが社会的背景として存在した。このような現象が相乗的に作用して、中間層の危機意識に発して労働者、農民、中間層からなる多階級的

な政治運動に発展した。

アヤ・デ・ラ・トーレはこのような海岸部北部に進展した社会変動を背景に、首都リマの国立サンマルコス大学での学生運動から労学連携のゴンサレス・プラダ人民大学の指導者となり、1924年10月にレギア政権と対立して国外追放処分に付されたことから国外の各地を拠点にアプラ運動を結成していった。アプラ運動の組織は1927年10月末に結成されたパリ支部を皮切りとして拡大し、綱領は1927年11月頃に策定された。

アヤ・デ・ラ・トーレは、1924年7月に訪ソし、当初はコミニテルンおよび反帝国主義同盟とも歩調を合わせたが、1927年2月以後国際共産主義と決別し、ペルー国内のマリアテギを中心とする社会主義者グループとの袂を分かって、ラテンアメリカの独自性を強調した急進的な政治運動を展開することになった。1950年代以後、PAPは右傾化したが、それまでは寡頭支配層およびその利益代弁者である軍部を強く対立する過激な活動形態をとり続けた。1930～40年代におけるPAPおよびアプラ運動の特徴である急進性は、寡頭支配層を形成する大土地所有層に対する反発を思想的基背景とした。

従って、アヤ・デ・ラ・トーレおよび初期のアプラ運動の急進性は、外国資本の浸透の結果生じた大土地所有制の拡大がもたらした結果であった。このように、アヤ・デ・ラ・トーレの1920年代における思想性およびアプラ運動の急進性は、資本主義システムの周辺部社会への浸透がもたらした社会変動の結果であったと言える。

注

- 1) ムリーリョは『アプラの歴史』の中で、「1924年5月7日の出来事は象徴的な意味にとどまらず、実践的にそこにアプラを誕生させた」と述べている [Murillo 1976: 34]。また、サン

チエス（1900～1994、1985～1990年第一副大統領）は『アプラに関する伝記のための諸点』の中で「アプラが設立された1923年5月7日」との表現を行っている〔Sánchez 1986: 29〕。

- 2) サンチエスは、この日の集会はアルゼンチンのホセ・インヘニエロスが死去したことに対する追悼集会であったと述べている〔Sanchez 1978: 47〕。
- 3) 『アマウタ』に掲載されたアヤ・デ・ラ・トーレのマリアテギ宛て書簡の中に記述されている以上、アヤ・デ・ラ・トーレやPAP関係者がいかにアプラの結成時期を1924年5月に遡らせようとしても、そのような操作を行うことは不可能であると言える。
- 4) ポルトカレーロはリマのマリアテギ・グループに属する社会主義者であったが、彼がアヤ・デ・ラ・トーレやアプラを擁護する立場をとったのは、この1928年3月の時点ではアヤ・デ・ラ・トーレとマリアテギとの間の関係はまだ決裂状態にはなかったためであろう。

参考文献

小倉英敬

2002 『アンデスからの暁光：マリアテギ論集』、現代企画室

2010 「20世紀初頭ペルーにおける”ヌエボ・インディオ”観」、『人文研究』（神奈川大学人文学会）第172号、1～28頁

Alexander, Roberto J.

1973 APRISMO:the Ideas and Dictrines of Víctor Raúl Haya de la Torre, Ohio, The Kent State University Press

Carnero Checa, Genaro

1956 El Aguila Rampante, México, Ediciones Seminario Peruano

Cossío del Pomar, Felipe

1961 Víctor Raúl:Biografía de Haya de la Torre, Lima, Ediciones Enrique Delgado Valenzuela

Enríquez, Luis Eduardo

1951 Haya de la Torre:La Estafa política Más grande de América, Lima, Ediciones Pacífico,

Franco, Carlos

1979 “Mariátegui y Haya: Surgimiento de la Izquierda Nacional” en *Socialismo y Participación* No. 8, Lima, CEDEP

Haya de la Torre, Víctor Raúl

- 1977a Obras Completas I: Por la Emancipación de América Latina, Lima, Editorial Juan Mejía Baca,
- 1977b Obras Completas IV: El Antiimperialismo y el APRA, Lima, Editorial Juan Mejía Baca Heysen, Luis E.
- 1977 Temas y Obras del Perú: A la verdad por las Hechos, Lima, Enrique Bracamonte Vera S.A. (3ra edición)
- Kantor, Harry
- 1955 Ideología y Programa del Movimiento Aprista, México D.F., Ediciones Humanismo
- 1964 El Movimiento Aprista Peruano, Buenos Aires, Ediciones Pleamar
- Klarén, Peter
- 1973 Modernization, Dislocation and Aprismo: Origins of the Peruvian Aprista Party 1870 –1932, Austin, the University of Texas Press
- Luna Vegas,Ricardo
- 1981 Mariátegui, Haya de la Torre y la Verdad Histórica, Lima, Retama Editorial
- 1990 Cintribución a la Verdadera Historia del APRA 1923–88, Lima, Editorial Horizonte
- Martínez de la Torre, Ricardo
- 1974 Apuntes para Una Interpretación Marxista de Historia Social del Perú I y II, Lima, Univ.Nacional de San Marcos
- Mella, Julio Antonio
- 1975 ¿Qué es al ARPA?, en “Mella:Documentos y Artículos”, La Habana, Partido Comunista Cubano
- Murillo Garaycochea, Percy
- 1976 Historia del APRA 1919–1945, Lima, Enríque Delgado Valenzuela
- Pavletich, Esteban
- 1934 El Mensaje de México, Lima
- Planas, Pedro
- 1986 Los Orígenes del APRA; El Joven Haya, Lima, OKURA Editores
- Ravines, Eudosio
- 1952 La Gran Estafa, Buenos Aires, Libros y Revistas S.A.
- Sánchez, Luis Alberto
- 1978 Apuntes para Una Biografía del APRA Tomo I, Lima, Mosca Azul Editores

- 1979a Apuntes para Una biografia del APRA Tomo II,lima, Mosca Azul Editores
- 1979b Haya de la Torre o el Político, Lima, Editora Atlántida (2da.edición)
- 1980 Haya de la Torre y el APRA, Lima, Editorial Universo S.A., (2da edición)
- Tamayo Herrera, José
- 1981 Historia Social del Cuzco Republicano, Lima, Editorial Universo (2da edición)